

第4回 岡山県総合教育会議 議事録

1 日 時 平成28年1月22日（金）〈開会:13時30分、閉会:14時17分〉

2 場 所 県庁3階第1会議室

3 出席者 知 事 伊原木 隆太
教育長 竹井 千庫
教育委員 田野 美佐 梶谷 俊介 中島 義雄
松田 欣也 上地 玲子

4 協議事項に係る出席者の発言

【事務局】

これより平成27年度第4回岡山県総合教育会議を開催する。
議事進行については、議長の伊原木知事にお願います。

【知事】

本日は、現在教育委員会において策定を進められている「第2次岡山県教育振興基本計画」、「来年度の重点的な取組」、「県内市町村教育委員会の取組」について、教育長から説明いただき、それを基に意見交換をしていく。限られた時間ではあるが、忌憚のないご意見をお願いします。

【教育長】

「第2次岡山県教育振興基本計画（案）」（※未掲載資料）であるが、1次計画の実施状況と岡山県教育大綱を踏まえて策定をするもので、教育大綱の方針を具体的な取組の形で示すものである。2月の教育委員会の会議で決定をする予定である。

目次のとおり、4章で構成し、第2章にある「1次計画に基づく取組の成果と課題」を踏まえる。

第3章は、5項目あるが、これは基本的に教育大綱の項目をベースにしている。

次に、1ページの中央あたりの「育みたい資質能力」は、1次計画から継続で「自立」「共生」「郷土岡山を大切に作る心」を掲げている。

3ページの「基本目標」は、教育大綱の言葉を踏まえている。「計画期間」は、平成28年度から5年間である。

11ページへ移る。具体的な取組を3章に入れているが、例えば「魅力ある学校づくりの推進」の中で見ていただくと、《施策の方向》、《主な取組》、下のほうに《目標指標》、それから次ページの上に《工程》という構成ですべての取組を書いている。《施策の方向》は基本的には教育大綱の基本方針を記載している。《主な取組》は、《施策の方向》に掲げた取組を、具体的に記載することとし、必要性、あるいは目指す姿を示している。《目標指標》は、各年度のものを示してい

る。平成 28 年までは「生き生きプラン」のものを入れ、さらに改善を目指すということで、具体的な数値を入れている。

14 ページの下に全国の学力調査の指標を入れている。平成 28 年度までは「生き生きプラン」で 10 位以内と位置付けているので、それを引き続き平成 32 年まで入れている。「生き生きプラン」の終了後は、どうするのかという意見もあるが、県警本部の「治安水準トップ 10」などをヒントにしながら、岡山県の子どもの学力は「全国トップ 10」といった言い方も、今後検討するのもよいかと考えている。「10 位」というより「トップ 10」と言うほうが、よりインパクトがあると思う。

なお、この目標指標は、最終の 45～46 ページのところに一覧で載せているが、かなりの指標を入れている。

12 ページの《工程》だが、これは 5 年間の工程、スケジュールを示している。今回初めてこういう形で掲載しているが、市町村教委や学校に県の取組内容をきちんと理解してもらおうということで、予算の裏付けはないが、書ける範囲で書いている。

以下、内容は省略させていただくが、基本的には教育大綱の具体化である。

次に、A 3 版の「第 2 次岡山県教育振興基本計画案 計画期間に取り組む施策の基本的方向」の資料だが、左側のページは、先ほどの目次でご覧いただいたものであり、右側のページは「平成 28 年度 重点的な取組」を記載している。

右のページ「平成 28 年度 重点的な取組」の左側の「○」が成果、「●」が課題である。

「平成 28 年度 重点的な取組」の一番上に記載している「落ち着いた学習環境」では、荒れへの対応ということで、(未然防止)(早期支援)(重点的支援)とターゲットを絞り、既存の事業もうまく活用しながら対応していきたい。

その下が、不登校問題である。不登校・長期欠席に対しては、効果が上がっている登校支援員の拡充を重点にする。

さらにその下が、「教師の教える技術の向上等」であるが、「授業改革推進リーダー」が効果を上げてきているので、これらを拡充をする。放課後の学習支援は岡山市を除くすべての中学校を網羅する。「教師業務アシスタント」の拡充と新規の「運動部活動支援員」の配置であるが、これらは教師の負担を軽減しながら、本来の教育活動にしっかり取り組んでいただく事業である。

「活力ある小・中学校づくり」は、おかやま創生総合戦略に基づき、小規模校の存続や、小中一貫教育など新しい取組をする市町村の支援を考えている。

一番下に主権者教育もあり、高等学校の取組を中心に、中学校における主権者教育も視野に入れた研究について、団体に委託をすることを考えている。

次の資料は「県内市町村教育委員会における主な取組」だが、今まで県教育委

員会はいろいろと方針等説明してきたが、それを踏まえて市町村においても独自の取組が広がっており、その主なものを挙げている。

まず倉敷市だが、「学力向上」ということで、市独自の学力調査を小5・中2を対象に行ってきた。他の市町村でも独自のものが増えてきており、岡山市も今まではやっていなかったが、平成29年度から実施する予算案が出ている。

「生徒指導」の欄の下のほうだが、倉敷市は生徒会の活動で「子どもミーティング」等、自主的な活動もどんどん実施していこうという動きがある。

次に赤磐市だが、右側のページの上のほう、2つ目の○「家庭生活習慣の改善」で「中学校区のスマホ等の夜間使用制限の取組」では、高陽中が非常に積極的に取り組み、大きく変わってきている。

それから、「生徒指導」では、2つ目の○「警察との連携」で、警察官や警察OBの方の協力も得ている。

真庭市は、「学力向上」の2つ目、3つ目の○で、地域と連携した、あるいは学校の中での徹底した補充学習に焦点化して取り組んでいる。学力は、若干波があり、まだまだ課題はあるが、こういう取組が増えていってきちんと根付いてくれば、学力も上がっていくのではないかと考えている。

これには、まだまだ書けていないが、知事も教育委員も学校訪問をされているので、また情報共有しながら取組を紹介してまいりたい。

説明は以上である。

【知事】

教育振興基本計画については、先般皆さまと議論を重ねて策定した岡山県教育大綱を踏まえて、さらに事業が具体的に推進されていることが分かり、今年度の総合教育会議を通じて、教育政策に対する方向性の認識が確実に共有されてきたと感じている。

また、教育長から説明があったが、市町村教育委員会や学校が県教委と同じ方向性で取組を進めていることが分かった。私も、学校訪問をしたり、頑張る学校応援事業の発表会で、県と市町村、学校の一体感を強く感じている。教育委員の皆さん、市町村や学校の取組などから、今後こういった方向に力を入れていくべきと感じているかなど意見を聞かせてください。

【教育委員】

私は、今まで小中高と学校訪問させていただいたが、時間が許す限りもっと行かせていただきたいと思っている。幼稚園・保育園・認定こども園は、特に遊びを通じての学習であり、1年生から本格的に勉強が始まるが、その学年ごとに、分からないことを分からないままにせず、年度末できちんと把握して、できないことをできるようにしていくことが大事だと思う。県教委で先生向けのスタンダードと保護者向けのスタンダードを作成し、それを各小学校・中学校に配布して、それを踏まえて勉強してもらおうとしている。なかなか学校の勉強だけでは難しいものがあり、家庭での自主学習の進め方というのはとても重要だと思う。小

さいころから勉強する習慣があればいいが、それがないと、いざやろうと思ってももうできない、どうやっていったらいいか分からない。学校訪問しながら、お互いに問題点を共有し合って、そこを解決できるようにしていけたらと思う。

【教育委員】

先ほど教育長から話があったとおり、学力の問題についてもいろいろな手は打ってきているが、これを徹底することが重要だ。結果をフィードバックすることも必要だと思うので、何をやって、その結果がどうなったか、それを次のテーマに書き換えることをきちんとやっていければ、きっと結果は出ると思う。

また、18歳まで参政権が下がったということで、今回研究という形で取組を出しているが、実際に夏の選挙では導入されるので、それに向けて具体的にやれることをやっていかないといけない。本来教育の目的は、よき社会人をつくるため、そのためには選挙に対して興味を持ち、実際自分で実行するというのをやってもらわなければいけない。この夏という非常に短い期間だが、具体的な行動をしていかないと結果に結びつかないという気がする。ぜひ、それを今後取り組んでいきたい。

もう一点は、岡山県は専門科教育が進んでいるという特徴があると思うが、教員が少しずつ高齢化し、足りなくなってきたという話も聞く。そういったことに対して、何か手を打っていくことも今後必要だと思う。専門教育を受けた人たちが地元に残って地元を支えているという事実があるので、そこを充実できるように、今後、県は教員体制を構築していかなければいけない。

【教育委員】

私もいろいろなところに訪問させていただいて、直接高校の生徒と話をさせていただく機会もいただいた。彼らは自分たちで考えさせれば、きちんと意見も言える。先ほどの選挙権の話ともつながってくるが、自分たちで体験を通してしっかり考えさせる活動を、小さいうちからさせておく必要がある。高校生になってからというよりは、小学生のうちからそういった取組をしっかりと実践させていく必要がある。

もう一つ、就学前という話があったが、就学前から、将来どんな自分を目指すか考える機会を与えれば、子どもが目標を持って学び、さらに次の目標を持つというサイクルを作っていけるのではないかと思っている。就学前からの取組、そして選挙権に向けて、小さい頃からディスカッションなどをしっかりさせていく必要があると感じた。

【教育委員】

「頑張る学校応援事業」のような、効果的なソフト事業をいかに数多く展開していけるかも大切になっているのではないかと思う。そのためにも、よく現場の声を聞いて現場の問題を把握する。我々教育委員会も、幼小中高それぞれの現場を回って、現状認識ができるようにしていかないといけない。

今、大きな課題が出てきているのは、やはり家庭のルールだ。学習のルール、

パソコンやゲームやインターネットのルール、このあたりが年々「ルールがある」と答えられる人が減ってきてしまっている。家庭に直接訴えていく手法を考えていけないといけないと思っており、新たな取組をより充実させていけるように頑張っていきたい。

また、団塊世代の大量退職という問題もあり、新しく入ってこられる新任の先生方の仕事も、年々ウエートが上がってきている状況だ。警察であれば、採用されてから1年間警察学校でみっちり基礎基本を見詰め直して、「学生とは違う社会人として」というような期間が設けられる。教職の方は、卒業するといきなり教壇に立って、先生としての役割を担っていけないといけない。県の総合教育センターがあり、サポートする体制もあるが、初任者がしっかりとした授業ができるような仕組みができればと思う。そこに対して、自分も知恵が出せたらと考える。

【教育委員】

いろいろ具体的な手は打たれつつあると思うが、子どもたちが自発的に勉強したいと思わせる、その動機をどう作っていくかがこれからもっと必要だ。「やりなさい」と、嫌々やらせてもなかなか身に付かないが、楽しみながら学びたいとなれば随分変わってくる。そういった意味では、生涯学習と学校をどう結び付けるかということが今後課題になる。

例えば、教育委員会の中でも、生涯学習課と義務教育課、高校教育課が連携しながら、自分の生活と学校の学びとをどうつなげていくのか、そんなことを体験しながら勉強する仕組みができていけばよい。根本的にどう生きるか、自分がどういう人生を歩んでいくかということと学校の学びとが、密接なのだということが分かってくると随分違う。そこをどうつないでいくかが、かなり重要になるのではないかと思う。

また、問題行動などは、起こした人の背景に何があるかもしっかりと押さえながら、それをどう解決するのかを考えていきたい。少年院や刑務所などがどのような教育をしているのか、いかに社会復帰させるのか、保護司はどうしているのか、根本的なところに何があるかなどを見据えて取り組むことが必要だ。

【教育委員】

私もいろいろ学校に行ったが、やはり現場の現状をしっかりと把握しないといけないので、現場に出向き、やるべきことをきちっと徹底していきたい。

それから、先ほど知事もPTAの研修会に行かれたようだが、要するに親も何が家庭教育なのかというのが理解できていない。私自身も、何が家庭教育かというのは、子育てしながら悩んだことはあるが、家庭教育で親がこれだけのことは家庭がやらなければいけない、子どもがどう言ってもここはきちんとやるんだという、線みたいなものを示していく必要があると思う。

それから、中学校の話を知ると、中学校の教員の意識を変える必要がある。小学校は学級担任なので、全部自分の責任になってくる。中学校は、国語と数学

の教員は学力テストで結果が出るが、国数の先生の責任で学校全体のものになかなかならない。また、言葉は悪いが、部活動と生徒指導に逃げてしまっている。こういう体制を変えていくために、来年度、授業改革推進リーダーや推進員を拡充し、学校あげて授業改善をしっかりとするとともに、中学校の意識改革をやっていかなければいけないと思っている。

もう一つ、小中高全部に共通して言えるが、子どもに対して非常に遠慮している。昨年高等学校へ行って、授業中の姿勢が悪かった。「なんであれを許すのか」と言うと、「いや、言ったら反発しますからね。」との回答があった。問題は、反発したときにどうするかだ。結局、反発も何もしない、そこでぶつかり合わず、お互いに遠慮しているから信頼関係も生まれてこない。超えられないのだ。なかなか厳しい保護者も多いが、スクールソーシャルワーカーなども活用して、「うちの学校はきちんとやるぞ」「手を掛けてやるぞ」「だけど厳しいぞ」というような関係を、小も中も高も作っていない。腰が引けている教員が見られる。それが、授業エスケープに対しても、寄り添っているけれども何ら変わらない。あの指導を変えていかないと駄目だ。

その時に、特別な支援が必要な子への対応は大変難しいが、「こうやっていきましょう」「ああやっていきましょう」という、そういう材料を我々がしっかり用意して、試行錯誤しながらやってもらうことが重要だ。笠岡市や総社市は、就学前から取り組んでいて、効果が上がってきているという話を聞いているので、来年度は、特に4歳児ぐらいから、これをモデルにやってみようと考えている。

【知事】

一巡目から非常に素晴らしいご意見が出たが、学校だけではなく家庭も大事だ、学校に入る前、就学前教育が大事、その後も含めた生涯学習が大事だという部分と、18歳参政権に対応をしなければいけないなど、私もそうだと思う。

1つ驚いたのが、委員からのご意見だ。そういえば、本当に先生というのは、免許を取ったらいきなり現場だ。医者の世界や弁護士の世界では、そういう貴重なリソースを生かすためのサポートスタッフが多くいる。学校は、それが全然できていない。「医者、弁護士の世界を見習おう」と言っている。訓練のプロセスも、専門家とは言えないような大ざっぱなやり方をしている。我々は、医師国家試験に受かったばかりの先生に手術なんてしてほしくない。やはり、その後のしっかりとした研修が必要だ。

2巡目は、「さらに」という、この議論をお願いします。

【教育委員】

先ほど、他の委員が言われたように、確かに大学を卒業した先生がいきなり担任を持って、学級が崩壊しかけたということが以前あった。その辺をもっと考えていかないといけない。先生自身もどうしていいか分からなくて、泣いている先生もいる。年齢にかかわらず、子どもたちのバックには保護者がいるので、今すごく大変である。せっかく夢を持って先生になったのに、最初でつまずいてしま

ってはかわいそうだ。その辺のフォローもきっちりしないといけない。

【知事】

それは本当に辛い。

【教育委員】

すごく大事な問題だと思う。

【知事】

先生が増えた時に、少人数にするのも一つの使い方だが、若手は、最初は副担任でやるというやり方も一つの考えだ。

【教育委員】

家庭との関係や社会との関係という観点で少し話が出ているが、今の子どもたちが地域とか、会社とか、いろいろ行く機会、社会を知る機会を増やすことが大切だ。また、自分の両親がどういう仕事をしているか、具体的に見えるような機会をもっと作り、親が苦勞をしている様子を見れば、勉強しなければいけないと思うのだと思う。そういうことをもう少し示すような施策をやっていき、何のために勉強するかを分かるようにしていくことが必要だと思う。

【知事】

そうだ。高校生が、こんな因数分解なんてどこで使うのだろうかと思って、青春の貴重な時間を無駄にする。確かに本当その先が分かっていると、随分違う。

【教育委員】

先ほど、総社市や笠岡市の例があったが、早期から、ちょっと気になる子どもをどんどん拾い上げて、徹底的に関わっている。今も、発達障害といろんなところで言われるが、いい面と悪い面がある。悪い面は、教員が自分の枠に当てはまらない子は全員「発達障害だ」と乱暴な言い方をしたり、もう一方で、「発達障害だから触っちゃいけない」「遠慮して声を掛けてはいけないんだ」「自分がやって、何か変になったら困る」ということが生じてしまっている。具体的にどういうふうに関わったらいいのかというのをみんなが知っていたら、そんなに恐れることはない。自分の枠に当てはまらないから「みんな発達障害だ」と言うと、もう関わりができなくなってしまう。そうではなく、本当に目の前の子どもがどういう特徴かというのをよく見て、その子に合った関わりができるように、先生方がみんなが育ってほしい。

保護者もちょっと自分がうまくしつけができないと「発達障害だ。だから、病院に行って薬を飲ませればいい」となり、結局家庭でも関わりが十分にできていないというふうになってしまう。人間なので、発達障害でも、そうでなくても、関わりはとても大事なので、その子その子に合った関わりを、専門家と一緒に相談しながらできる環境を作っていくべきではないかと感じている。

【教育委員】

私自身、マニュアル時代の世代になるのかもしれないが、今家庭でも、地域でもそうだが、手本が目の前にあると分かるが、手本がないとやらないというよう

なことが年々増えてきているのではないかと思う。マニュアルの時代は終わって、手本のないことにチャレンジしていくというような時代だとは思いますが、我々教育の立場では、まずはきちっとした手本を示して、どうしてやらないといけないかというようなことを、はっきり打ち出していくことが大切だ。

もう一つは、幼小中高と地元において、高校で進学をして、岡山から出て行って帰ってこない人がいる。そのことが、社会減にもつながる。こういった中、自分の地域にどんな会社があるのかということが、子どもたちから見えなくなっているのではないかと思う。私も高校のときに、地場の企業がどんな技術を持っている、どんな会社があるのかのということを知らないまま大学に行ってしまった。こうなると、地元にとりだけの受け皿があるのか分からない。高校3年生の中で、就職する生徒だけでなく、進学して外に出ていく生徒にも、岡山の地場企業や、経済の特徴を教え、将来夢を描いて帰ってきてもらえるようにしたい。自分たちの地域にはこんな会社があるということを知った上で、大学で勉学をしてもらうことにも、企業と連携していきながら力を入れていかないといけない。

【教育委員】

普通科の高校ではキャリア教育はほとんどされていない。例えば、職業科の高校へ行くと、町の企業の方が来賓で来られたりするが、普通科はほとんどそういう姿が見られない。普通科こそ、将来、大学に行って本気で学ぶためにも、きちんとキャリア教育とか、自分の人生をどう生きるかとか、仕事と絡めたようなことを入れていくことが非常に大事になってくると思う。

それから、今後高校は人数がこれだけいないと統合だとかいろいろ言われているが、学校がなくなると、その地域そのものがどうかという話になる。以前だと、学ぶというのは、ある程度の人数がいらないといけなかったが、これだけインターネットでバーチャルの世界にいると、本当に勉強するということは、必ずしも大人数の学校でなくてもできるのかもしれない。多くの子どもが集まって同世代で関わるのは、例えば複数の学校が一緒になって運動会をするとか、そういうふうにする。日頃は、地域の大人たちと関わりながら、教科書の学びは、通信とか、そういうバーチャルで学べるものは学ばせていく。これだけいろいろな情報通信が発達してくると、本来は何が目的なのかを押さえながら新たな教育の在り方とか、それを作っていくことをやらないと、今の学校でこれだけ人数が必要だから統合しましょうとすると、学校がなくなる。そうすると、地域がなくなるというような事態になる。

また、高校の先生は自分の高校だけではなく、その高校のある一つの地域をどうするかという観点で、小学校と中学校とも関わっていくことも、これから考えていく時代なのかと思う。

【教育長】

教育委員の皆さんから、いろんな提案をいただいた。できるだけ優先順位を付けながら、実現に向けていかないといけない、そういうご意見だったかなと思う。

【知事】

本日は、大綱を踏まえての今後の取組の方向性について話し合っていた。大変いい示唆をいただけ、大変意義があったと思う。

今後の予定について、事務局のほうから説明する。

【事務局】

今年度の通常分の会議は今回が最後となる。

来年度も数回の開催を予定しているが、議題に応じ、臨機応変に開催していきたいと考えている。

次回の会議は、事務局からあらためて通知させていただく。

【知事】

以上で「第4回岡山県総合教育会議」を終了する。

ありがとうございました。